

ろくべん館だより Vol.38

『なぐり合う社会』

東京に住んでいる娘が、「今日はとうとう電車の人身事故の現場に行き合ってしまった」と、電話の向こうで息を吐いた。これまで、乗った電車が人身事故の影響で止まってしまうというのはよくある出来事だったそうだが、ビニールシートで覆われた現場を通りかかるのは初めてだと言った。東京近郊では毎日のように、人身事故で〇〇線が不通というニュースを目にする。そのたびに、都会は病んでいるなあ、と思わずにいられない。

今年三月に開かれた「地域まめったいサミット」の講演会で、哲学者の内山節さんは、いまの経済構造を「なぐり合いをしているようなもの」と表現した。自分が勝つためには誰かを叩き落とす。利益を追求するためなら、法に触れない限りなんでもやる。それが市場経済の競争原理だと。

かつて品質の確かさを誇った日本製品も、人件費の安い海外に生産の場を移し、衣類や家電のほとんどが輸入品ということになっている。内山さんによると、国内で電気冷蔵庫を製造しているのは一社だけになってしまったそうだ。価格競争に巻き込まれると、安くつくることが至上の目的となり、正規雇用は首を切られ、非正規雇用ばかりが増える。その結果品質の低下を招き、メイド・イン・ジャパンへの信用は損なわれた。労働条件は悪化し、そんなしくみの中で働くひとたちは、疲れと虚しさと他者に尊重されることのない仕事の中に身を置くことになってしまった。

そういえば、二〇年以上前、大鹿村の産業文化祭に農家が出品する生産物は、今よりはるかに種類も品数も豊富だった。当時、中学校の体育館にズラリと並んだ農産物を見てワクワクしたことを思い出す。中でも目をひかれたのが「繭玉」だった。選りすぐりの美しい繭玉が並んでいた。珍しい黄色の繭もあったと記憶する。村に移住した当時、集落の中で養蚕をしていた家はまだまだ残っていた。それが、中国からの安い絹の出現によって、村の養蚕は急速に姿を消し、産業文化祭にも繭が並ばなくなった。集落の老人は自分も賞を取ったことがあると、養蚕に励んだ日々を誇らしく語ってくれたが、日本の絹産業を支えてきたそんな山村のひとびとの努力も工夫も、「安さ」という基準の前に失われてしまった。

内山さんは、その著書の中で「仕事がこわれていく・・・日本という労働社会はその歯車を止めずにいる。だが、歯車から聴こえてくる音は心地よい音ではなく、ギスギスしたきしむ音。その音のなかに、こわれていく何かを感じている。それが現在の私たちの仕事に対する感覚になろうとしている」と記している。ギスギスした音は都会にかぎらず、山村にまで聴こえてくる。

内山さんは群馬県上野村という山間の村に住んでいる。溪流釣りの好きな内山さんは、

あちこちの山や森を歩き、上野村もそのひとつだった。何度も通ううちに住むことを決めたそうだ。大鹿村にもよく来ていたと語ったが、釣りが目的だったのだろうか。東京に仕事をもち内山さんは、東京にも住まいがあるが、用事を済ませると上野村に帰る。

その上野村は、三年前の原発事故で甚大な被害を受けた。放射能による汚染は、東京と同程度だというが、村の主要な生産品である原木栽培のシイタケから、100ベクレルを超える放射能が検出され、一年間の出荷停止となった。漢方薬に使われるキハダの樹皮も出荷停止になった。キノコ類は、ホダ木にする樹木が少しでも放射能を浴びていると、それを吸収し濃縮してしまう性質をもつ。菌床栽培に使われるオガクズも汚染されている木から取られたものは同じことだ。村の木をこれまでのように使えなくなってしまったからは、九州などの遠隔地から木を買い、今もシイタケ栽培が続けられている。国の基準は100ベクレル以下だが、村では20ベクレル以上は出荷しないという自主規制を設けた。

原発事故は人間にも自然にも大きな影響を及ぼした。原発はいろんな他者の犠牲のうえに成り立っていた。原発だけのはなしではなく、いまの市場経済のしくみ自体が誰かに犠牲を強いなければ成り立たない。内山さんはそれを踏まえたうえで、次にこんな提言をされた。「なぐり合う経済の一方で、助け合おうと社会に言っても無理な話。誰かを犠牲にするようなことをつづけていては、社会はよくなる。そんな市場経済とは別に、自分たちでともに生きる経済をさぐろう」と。

そもそも経済とは、人間が暮らす営みの中にあって多様なものだった。お金の動くことばかりが経済ではない。たとえば、山に暮らすひとが魚を捕ったり、山菜を採り行くのも経済活動のひとつといえる。それが沢山とれたので出荷をすれば、金銭的な収益となる。また、自分ひとりでは食べきれないものを、近所におすそわけしたなら、それもまた非金銭的な豊かさを生み出す。これらも経済活動なのだという内山さんの説明に、山村が内にもっていた豊かさの本質に気づかされた。何事も金銭的利益に換算するなら、山村は貧しいという以外にないだろう。しかし物の動きには、目に見えない喜びややさしさも一緒についてまわる。物だけでなく、精神の豊かさもそこには存在するのだ。

経済が発展すると反比例して、人のつながりは希薄さを増した。それが顕著に現れている東京では、亡くなる人の十人に一人は誰にも引き取られることなく、悼まれることもなく葬られるという。そして自殺者の増加をみる。都会の病巣を癒すことは困難だ。今の日本で、山村のような小さな規模のコミュニティーにこそ、他者を犠牲にしない、ともに生きる経済のヒントは隠されているようだ。